



相談電話

027-221-0783

(おなやみなら)

群馬いのちの電話だより

2013.2 No.50

編集・社会福祉法人群馬いのちの電話 広報委員会
住所・〒371-8691 前橋中央郵便局私書箱6号
電話・事務局 027-221-1880 FAX027-220-5666

『いのちの電話という生き方』

社会福祉法人群馬いのちの電話研修委員長 北川 恭史

私が「いのちの電話」に関わりはじめて、早いもので30年が経ってしまった。

昨年、20周年を迎えた「群馬いのちの電話」の第一期電話相談員養成の頃から、ボランティアの皆さんとの研修に当たってきたのである。

ここ数年は頼まれてあちこちで講演することも多くなつたが、外で必ず訊かれることは、「相談員の方はさぞや人生経験豊かで立派な方ばかりなんでしょうね」ということである。

私は決まってこう応えるようにしている。「いえいえ、電話を受けておられるのは皆さんと全く同じ市民の方ですよ。でも、その熱意には研修を担当する私も脱帽しっぱなしです。」と。その続きで、これも決まって言わわれることは、「そうなんですか。でも、どうして普通の市民の方が相談員になろうと思われたのでしょうか。」という質問である。

動機は十人十色である。それぞれの方の人生の機微が、その人固有の応募の動機になっている。お一人おひとりの経験と出会いを土台として、機が熟して「いのちの電話」と出会い、ボランティア活動を始められる。20ヶ月にわたる研修を修了し、はれて電話相談員として認定されてからも、その活動は一本道ではない。迷う

ことや自信を失うことも稀ではない。相談員の方から「何度辞めようと思ったことか」というセリフを耳にすることもよくある。

それでも、電話担当に出て、相談員を続けておられる。何が相談員の方々を支える原動力になっているのだろうか。

ご存知のように、「いのちの電話」の特徴は、かける方も相談員も匿名であり、しかも研修を受けたボランティア相談員によって成り立っていることである。

だから、相談員をすることによって、交通費や研修費として持ち出すことはあっても、金銭的に何か得をすることは全くない。名誉や賞賛はどうか。自分の名を世に知らしめることはないわけだから、功名心や自負心が満たされることもない。達成感はどうか。一本の電話は切れてしまえばその結果を知ることはできない。匿名の電話相談は、いつも未完であり、途中であると言える。かけ手の悩みの終結に立ち会えることはまずない。電話相談は、いつも「つづく…」で終わるのである。

それでも、相談員の方は電話の前に座り続け、「受話器を持ち続けて手がしびれちゃった」とか「耳に押し当てすぎて、耳が痛くなっちゃつ

相談電話

027-221-0783

(おなやみなら)
相談受付時間 午前9時～午後9時30分 (年中無休)

深夜

027-221-0783

毎月第2・4金曜日は24時間受信

毎月第1・2・3・4金曜日

受付 (9:00～夜中0:00)

フリーダイヤル(毎月10回)

0120-738-556(8:00～翌8:00)

た」と笑って話しておられる。普段の生活の中で、受話器の重みを感じることがあるだろうか。

しゃべり過ぎて声がかけたという相談員を聞いたことがない。電話を受けておられる後ろ姿を見ると、目の前に「かけ手」の人がおられるかのように、身を前に乗り出し、耳と心を傾けて電話を受けておられる。

なぜここまでして電話相談員を続けておられるのか。私はさきほど得るものはないと言ったが、目に見える「得るもの」は何もないという意味である。目には見えない得難いものを得ておられるからこそ、相談員の方はボランティアを続けておられると言うことだ。

人の悩みにふれると言うことは、耳を傾ける私自身が激しく揺さぶられ問われる出来事である。公式通りに平常心で中立的に臨むことなど到底できるはずもない。特に匿名の電話相談は、かけ手も身構える必要がないのでストレートに心を開いてくださる可能性を秘めている。その分、聴く相談員の心にもダイレクトに感情や思いが伝わってくる。同情したり憤慨したり溜め息をついたり、また時に反発したりしながら、電話してこられた方の人生を「あたかも」自分の人生のように体験され、思いを共にされているのである。

ある時、ひとりの相談員がこんなことをおしゃっていた。「私は今まで自分の人生しか知らなかっただけど、電話を受けるようになっていろいろな人の人生を生きてきたような気がします。」

私は、ハッと気づかされた。相談員の方は、「いのちの電話」という生き方をしておられるのだと。人間は、家族とか職場、地域など様々なコミュニティに所属しながら、そのメンバーの一人として生きている。流行の言葉で言うならば、「いのちの電話」世界という新しい世界が生まれて、かけ手も相談員もその市民として互いに支え合っているのではないかと言うことである。

そこでは、この世での名前も地位も所属も関

係がない。唯一あるのは、心を持ったひとりの私という存在である。現実世界では、しがらみや利害が邪魔をして語ることのできない心の世界を、匿名電話だからこそ思うままに話すことができる。「いろいろな人の人生を生きてきたような」体験と相談員が表現していることは、その心の世界にふれ、寄り添うことができたからであろう。小説やドラマではなく、現実的な他者の人生。相談員にとって、もはや他者の人生ではなく、自分の人生に起きた出来事のひとつとして感じられる。私がそのことを考えるようになったのは、電話相談員の養成や研修に携わる中で、相談員が電話を受けている間はもとより、電話が切れた後も「かけ手」を心にとめて、自分自身を振り返っておられることを何度も体験したからである。

電話はすでに切れてしまった。けれども、その電話の世界は相談員の中に残り続けている。危険なことであり、ケアが必要な場合もあるので、「いのちの電話」では、電話相談に出る限り、相談員はスーパーバイジョンや継続研修を受けることを義務づけている。

相談員がこの活動を継続する原動力は、余った時間を社会に還元したいといった慈善事業的でも余暇的なものではなく、この「いのちの電話」という生き方」を新しい自分の生き方として選択されたからではないかと考えるようになってきた。そう考えれば、電話を受けておられる後ろ姿や研修中の生き生きとした姿に納得できるのである。

「いのちの電話」は、現代社会が生み出した新しいコミュニティーの可能性を指し示しているのではないだろうか。

このことを可能にしたのは、電話機の大きな進歩とその使われ方の変化である。

「リーン、リーン」から「トゥルルルル」へと、「ジー、ジー」から「ピッポッパッ」へと機械の出す音も時代と共に変化した。今や自分の好きなメロディーや歌を呼び出し音として設定したり、振動で着信を知らせる機能も当たり前で、音を立てずに持ち主に着信を知らせ

ることも常識である。

小型化し多機能化した機械の進化は、何よりも、電話を人のカラダの一部へと変えた点である。だからこそ、違う呼び出し音で自分らしさ（個性）を主張する。

電話するという行為が、誰かの家を訪問したり会ったりすることと全く違う感覚になりつつある。現実にはそこにいない人といつどこからでも、「おはよう」と挨拶したりハイタッチできる皮膚感覚に近いものになっている。

私は、その小さくてプライベートな、魔法の箱型通信機に未来のコミュニケーションの可能性を感じている。人が人とつながる、つまり絆の古くて新しい姿。顔と顔を合わせる、直接手をつないだり、抱き合ったり、肌の温もりを伝え合ったりというコミュニケーションも可能となるかもしれない。

「いのちの電話という生き方」が生み出した世界は、ひょっとするとその先駆けかもしれない。

匿名社会という言い方は、無責任で誹謗中傷する社会のようにマイナス面で捉えられることが多い。私は、そのプラス面の可能性を信じている。匿名であるが故に、対等にコミュニケーションでき、いろいろな人が互いに支え合うことが可能となる。

リットマンの法則として知られている「危機が深いほど、専門的ケアを必要としない」という言葉は、「いのちの電話」の活動の原点と言ってよい。自死というぎりぎりの危機に対処するひとつ的方法として、市民ボランティアが電話を通して寄り添うことの力は決して小さくはないと思う。

最後に、私がなぜ「いのちの電話」に関わるようになったか、電話一本の可能性を自戒をこめて紹介したい。

私は、高校の時に中学時代の親友を自死で失った。亡くなる3ヶ月前、彼から一通の不思議な葉書を受け取っていた。「北川が昔言っていた言葉の意味が、今わかる」というものだった。何のことだかわからなかった私は、とりあえず

封書で彼に返事を書いた。自分が何を書いたかさえ記憶がない。折り返し直ぐに、彼から長文の返信を受け取った。その時の彼は、私が知っている昔の彼だった。そして、手紙の終わりに「久し振りに会いたい、会って話がしたい」と記されていた。

けれども、私は一往復した郵便のやりとりで安心して、暇になってからでいいやと彼の悲痛な叫びを勝手に聞き逃してしまったのである。それどころか、そんなことがあったことさえすっかり忘れてはいた。

次に彼のことを思い出すのは、町でたまたま会った別の友人から彼の死を告げ知らされた時のことである。

最初に葉書をもらったのが年明け早々の冬、彼が自ら命を絶ったのは桜が散った後の春、そしてそのことを私が知ったのは梅雨明け間もない夏だった。彼の家までわずか数キロ、なんと遠い距離にしてしまったのだろう。

大学へ行ってからも、彼を見殺しにしてしまった罪責感と、私に出来ることがあったのではないか、いや自分には何もできなかつたという堂々巡りを整理されないまま引きずっていた。「いのちの電話」のことを知った時、彼からのメッセージだと思い関わるようになったのである。

時は一瞬にして流れる。長い手紙を書くよりも、なぜあの時すぐに電話しなかったのだろうか。携帯電話が登場するはるか昔の出来事ではあるが、今でも「電話一本」が悔やまれる。

私に何かが出来るとも思わないし、私ひとりが抱えることも出来ない。無力だからこそ、いろいろな人が関わり支えていく。

今日、誰かが自分の話に耳を傾け、思いを受けてもらえた。明日、また別の誰かが私の言葉に思いを向けてもらえた。

「いのちの電話」の働きは、一日一日を支えること。まどろっこしくもあり、最も確かな寄り添いであると思う。悩んでいる方の“今”にかかわっていくことだから。